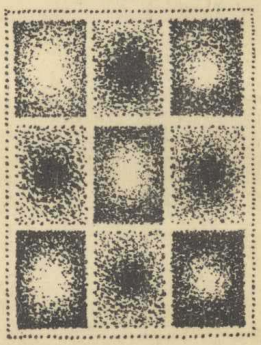
幻視と変奏

――川村二郎評論集――

川村二郎

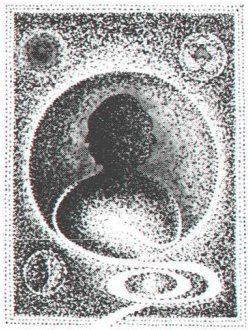


新潮社版

幻視と変奏

―― 川村二郎評論集 ――

川村二郎



新潮社版

幻視と変奏

© Jiro Kawamura, Printed in Japan 1971

印刷／1971.3.15　発行／1971.3.20　定価／700円

著者　川村二郎　発行者／佐藤亮一

発行所／新潮社　郵便番号 162　東京都新宿区矢来町71
電話東京 (03)260-1111　振替東京808

印刷所／東洋印刷株式会社　製本所／新宿加藤製本

乱丁・落丁本はお取替え致します。

幻視と変奏　目次

I

わが意に反した物語作者——太宰 治論——　8
観察としての小説——井伏鱒二論——　21
闇のなかのユートピア——吉行淳之介論①——　46
金属の薔薇——吉行淳之介論②——　68
内攻したプラトニズム——河野多恵子『草いきれ』について——　85
抽象の風景——立原道造小論——　96

II

二つの世界に係わること　110
あさましき香　140

III

ウィーンの精神　152
四度で啼く郭公——マーラー随想——　168
バロックについて——ひとつの回顧的感想——　181

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

IV 二冊の本 198

●寓話の精神
倉橋由美子『スミヤキストQの冒険』
エルンスト・ブロッホ『未知への痕跡』

●夢の観相学
江戸川乱歩『パノラマ島奇談』
アラン・ロブ＝グリエ『快楽の館』

●伝記と批評
岡野弘彦『折口信夫の晩年』
クラウス・ヴァーゲンバッハ『若き日のカフカ』
『討論　三島由紀夫vs東大全共闘』

●至福の空間
ガストン・バシュラール『空間の詩学』

●自由への悲歌
椎名麟三『懲役人の告発』
チェーザレ・パヴェーゼ『流刑』

●短篇の変容
瀬戸内晴美『蘭を焼く』
ジョン・アプダイク『アプダイク作品集』

あとがき 258

装幀　前田常作

幻視と変奏

川村二郎評論集

I

わが意に反した物語作者

――太宰治論――

「僕は、どんなにでも巧く書けます」

これは、『斜陽』の中の一句である。

いうまでもなく、作者太宰治自身の宣言であるわけはない。作中人物の一人が日記の中に書きつけた、乱雑な章句の一断片である。それにもかかわらず、ぼくには、これが太宰の作家としての真率な、しかも当然抱いてしかるべきだった自負の披瀝のようにみえるのである。

それは独立した一行ではない。この前に、「ゲェテにだつて誓つて言へる」とあり、この後には次のようなことばがつづく。「一篇の構成あやまたず、適度の滑稽、読者の眼のうらを焼く悲哀、若しくは、粛然、所謂襟を正さしめ、完璧のお小説、朗々音読すれば、これすなはち、スクリンの説明か、はづかしくつて、書けるかつていふんだ」

だれの目にも明らかな通り、この文脈は「巧く書く」ことへの辛辣きわまる罵倒にちがいない。だが、辛辣さというものは、意識的であるかないかは問わず、極端な形をとった時、非常にしば

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

しば自虐的な破壊衝動と結びつくものである。この「巧さ」への弾劾は、晏如として世にときめく小説書きの手だれたちに対する、志を得ない文学青年の嫉妬と敵意の爆発的な表現ともみえようが、書きさえすれば巧くなってしまう、自己の才能への嫌悪のあらわれともみえはすまいか。おそらくそれはどちらでもあるので、この場合、どちらの比重が大きいかということは立ち入って考えるほどのことでもない。ただぼくにとっては、ここから、小説の名手としての太宰というイメージを、いわば陰画の形で読みとることができれば、一応事足りるのである。

太宰はたぐい稀な小説の名手である。何よりもまず、ほんのささやかな、それこそ一小節ばかりのモチーフから、花やいで歌う長大な旋律を、応接の暇もないほどひきもきらずに抽きだしくりひろげる能力において、彼は群を抜いている。ゲーテが母から受けついだと称する「お話を作る fabulieren」能力、それをおそらく彼はゲーテ以上に豊かに持ち合せている。最初の作品集『晩年』の中でいうなら、あるいは「魚服記」や「猿ヶ島」が、あるいはいみじくも銘打たれたものと感じ入る「ロマネスク」が、後の作品でいうなら、第二次大戦中に多く書かれた古い物語の換骨奪胎ともいうべき諸作、とりわけ『お伽草紙』が、この能力の最もかがやかしい顕現だといっていいだろう。

一人の作家の特性を、その生れ育った環境によって見さだめようとする試みは、いわゆる文学風土記風ののどかな閑談口調ならばともかく、しかつめらしい環境理論へ傾けば傾くほど信憑性を失わざるを得ない運命にある。人間はだれでも環境の子かもしれないが、人間の仕事は、環境を踏みこえる一点をそなえることなしには、そもそも仕事の名に値しないはずである。だから、太宰について考える際に、彼の稟質をすべて彼の出自に、つまり東北の豪農の子という事実に還

元して考えようなどとは、もちろんぼくは思わない。しかし少なくとも、彼の fabulieren の能力に関しては、東北の土壌を思い浮べながら臆測をめぐらす時、意味深い啓示のかずかずが与えられるように思うのである。

東北は民話、伝説の宝庫といわれる。民俗学者たちの探訪のメッカであることが、この地方の名誉、いわんや幸福であるかどうか、はなはだ疑問だろうし、また、およそ人間の生活が遠い昔から営まれてきた所なら、どこであれ、あるいは文書であるいは口頭で、さまざまな伝承が受けつがれていることも事実だろう。だが、義経没落の後、実に四百余年にわたって生きながらえ、源平合戦の物語を語りつづけた常陸坊海尊（ひたちぼうかいそん）のような人物は、東北でなければ決してその長寿を保つことができなかったろうと、つまりいいかえれば、ほかならぬ東北人の、物語への強い執着こそが、この奇態な仙人をかくも長く世に在らせずにはおかなかった原動力にちがいないと、ぼくには思われる。恐山のイタコなどというのは、何となく陰惨な感じでぼくは好まないが、彼らが語る冥界の消息を涙を流して聞き入る老人たちの心には、案外に、虚構の物語を虚構として楽しむ、大らかに花やいだ思いがゆらめいているのではないか、という気もする。

ウソを巧みに語り、また聞くのを喜ぶ感覚は、厳粛な面持でもっぱら実利を追究し、無用の饒舌や虚飾を忌む近代社会においては、おそらく急速に衰微した。そしてこの衰微が、柳田国男のいうように、われわれの文学をさびしく寒々としたものにしてしまったのかもしれない。「泉鏡花が去つてしまつてから、何だかもう我々には国固有のなつかしいモチーフに、時代と清新の姿とを賦与することが、出来なくなつたやうな感じがしてならぬ」と柳田は嘆くのだが、これはとりも直さず、ウソ、といって悪ければ民衆の心の底に流れる夢や幻想に、完成した文学表現の中

で再会することができぬという嘆きにほかならない。

太宰はその稟質において、優にウソの文学を再興する資格があった。「思ひ出」の第一章に、「嘘は私もしじゆう吐いてゐた」ということばがあるが、その後につづけて列挙された嘘の実例は、少し修飾を加えれば、柳田が「イツハリ」と区別すべきだという「ウソ」（つまり文学的虚構）の例に用いることができる類いのものである。つまりそれらは、陰湿な敵意や保身の欲求の表現であるよりは、むしろたくましい空想力のおのずからな逸脱に近い。雪国の春、ありとあらゆる庭の木がいっせいに花をひらき、その花ざかりが一時に押しよせてくるかのような趣さえ、そこに予感されているといってもあながち強弁とはなるまい。

ただここで注意しなければならないのは、そのような、本来陰湿でも何でもない、自由な夢のあらわれであるはずの嘘が、太宰自身にはきわめて陰湿なもののように自覚されていることである。作文に嘘を書くと先生にほめられ、本当のことを書くと叱られる。この事実を書きとめる時、おそらく書き手のうちには、嘘をつく自分と嘘を喜ぶ他者との双方に対する苦々しさがある。もちろん作文の嘘は、空想の産物ではなく剽窃ということになってはいるが、一般的にいえば、虚構に支えられた文学は、多かれ少なかれ剽窃の要素を含んでいるはずのもので、それを潔癖に拒否すれば伝統的な文学の大半は崩壊せざるを得ないだろう。すなわち、太宰の資質は近代以前の文学のありように深くなじんでいながら、彼の意識はそのありように順応するには、あまりに近代的であった、ということになる。

資質と意識とのこの乖離から、独特な太宰のアイロニーが生ずる。周知の通り彼は一時同人雑誌「日本浪曼派」に所属していたけれども、いわゆるロマン的アイロニー、現実界における絶対

的無力感と非現実界における絶対的優越感との複合は、彼とは無縁である。もっとも、一見それらしく見えるものを彼の作品から探しだすのは困難ではない。いやむしろ、『晩年』の中の「猿面冠者」といい「逆行」といい「めくら草紙」といい、あるいは『ダス・ゲマイネ』といい『二十世紀旗手』といい、ある意味ではこの種のアイロニーにみちみちているとさえ見えるかもしれない。だが、大方のロマン主義者が持ち合せていて、太宰には欠けているものが、少なくとも一つある。すなわち、無力を認識し得る知覚の力、弱さを感じとる能力の強さへの、窮極的な信頼が。この信頼は人間の最後の誇りといっても傲慢といってもいいものだし、それの欠如は、宗教的な謙抑へ一直線に通じる空洞ともなり得るだろう。その意味からは、宗教的、ないし倫理的色彩に濃く染められた太宰論がすでにおびただしいという事実も、ことさら怪しむには当るまい。

しかしはたして太宰が、しかく真摯な求道の人だろうか。生活人としての彼がそうであったかどうか、ぼくに知ることはできないし、また格別興味もない。いずれにせよ読者の彼に対する手がかりは、残された作品しかないのだ。このことは、作品の美的分析のみですべて終れりとせよということではない。たとえ作者の人間を知ろうとするにせよ、作品を通じる以外道はないということだ。そして、この道を通じるかぎり、太宰に宗教的な志向、超越へむかう垂直面の動きを読みとるのは容易でないとぼくには見えるのである。

彼になんらかの宗教性に近似した意向があるとすれば、それは、純潔な生への執着、とでもいったらよいものだと思う。この執着が最も自然な理解しやすい形で表現されているのは、第二次大戦中の作品、特にその末期において書かれた『津軽』だろう。この紀行文は、珍しく抑制のきいた明るい文体によって、太宰の作品の中ではむしろ異例に属するものだが、さまざまな資料を

用いてつづられた彼自身の故郷の風土記が収斂されて行く先は、この風土の中に生きる人間の、並はずれて美しい内面の世界なのである。ここには「汝を愛し、汝を憎む」という「故郷に贈る言葉」も書きとめられていて、太宰の郷土意識におけるアンビヴァレンスを証するものとしてしばしば引用される。程度の差こそあれだれもが心の底に宿すのが常であるこのアンビヴァレンスが、太宰の場合には桁はずれに強烈だったということも、あるいはあるかもしれない。しかし少なくとも、それをあからさまに示すことばそのものを含んでいる『津軽』には、「憎む」心はほとんど前面にあらわれず、もっぱら「愛する」顔ばかりが匂やかに浮きあがっているように感じられる。それというのも、風土の代表者、やや大仰な修辞を用いれば、生ける地霊ともいうべきかずかずの人物たちへの愛情が、ここで惜しみなく吐露されているからである。

たとえば蟹田のSさん。この人物の「津軽人の本性を暴露した熱狂的な接待振り」の描写は、いかにも太宰調の誇張にみちているようで、筆者が、これは決して誇張法を用いているのではないとことわっても、はたしてそうか、疑わずにはおれないほどのものだ。しかしそれにもかかわらず、その疾風怒濤のような愛情の表現が、本質において真正なものであることを疑う余地はない。誇張としかみえないそれについての描写が、ただなつかしさといとしさのためにのみ誇張されているのだと思われ、そうせずにはいられない筆者の衝動の真実を感じとる時、描かれた事実の真実性をも読者は疑うことができなくなってしまう。あわただしい目にはグロテスクな印象さえ与えかねない疾風怒濤の接待を、そのままで、かぎりなく質朴単純な心の発露と読みとるよりほかなくなるのである。

単純な心。『津軽』は、筆者の幼い時、母代りの役をつとめてくれた女中との再会で結ばれて

いる。もちろん太宰は、同じ無知で素朴で善意にあふれた女を描くにしても、フローベールのようにきびしく筆を抑え通すことはできない。だれが見ても感動的な再会は、まさしく感動的に、見方によっては感傷的に描かれている。だが、感傷的に筆を踊らせながら、しかもそこにとらえられた平凡な中年女の姿が、なんとあざやかな輪郭をそなえていることか。作家としての才能のあらわれだといってしまえばそれまでだが、このあざやかさは、やはり、太宰があこがれてやまぬ単純な心、生活の至上の純潔さと、稀な形でめぐりあえたという僥倖によって支えられているように思われる。だからこそ彼は安んじて、最後に「私は虚飾を行はなかつた。読者をだましはしなかつた」と書きとめることができたのである。

だがそれにしても、僥倖にめぐまれたこのような安らぎは、あくまでも例外的なものだといわなければならない。安らぎというなら、『東京八景』の終段にも、一種それらしいものがかいま見られはする。しかしそれは、『津軽』の場合のように鮮明な輪郭に縁どられてはいない。あえてたとえれば、強いられた、というより、われとわが身に強いて辛うじて作られた安定、その周囲には曖昧な不安定な空気がたえずゆれていて、いつ平衡が破れるともはかりがたい危うげな印象が、拭いようもなく全体をつつみひたしている。ぼくの臆測では、このような安定において作者は、みずからの固執する純潔な生のイメージを定着させようと努めながら、その努力のただなかにあって、努力の空しさを、安定の不可能を感じとっているのではないか、という気がするのである。「巧く」書いてしまうことの虚飾にはたえられない。といって、虚飾を排除してひたすらに心願の的なる純粋な生の真実をさぐりだそうとすれば、ことばはそれが宿命的にそなえている比喩＝仮象としての性格をかえってあらわにしながら、真実をもとめる作業を妨害し、裸形の真実、裸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com